

フランソワーズ・サガンの *Le miroir égaré* についての一考察

——サガンの最後の小説作品を読む——

西岡 杏奈

はじめに

小説, *Le miroir égaré* (1996)『失われた鏡』¹⁾は2004年にこの世を去ったフランソワーズ・サガンの現在出版されている最後の小説作品である。

サガンを一躍有名にした『悲しみよこんにちは』(1954)から40年あまりの時を経たのちに出版されたこの小説はどのような物語なのだろうか。ちなみにこの作品は日本語ではまだ出版されていないため、本稿における使用テキストからの引用の日本語訳は著者によるものである。なお、サガンの『失われた鏡』の執筆時の私生活の様子や、文体分析についての箇所は今回 *Sagan à toute allure*『サガン 疾走する生』を大いに参考にさせていただいたことをここに明記しておきたい。

サガンの死後、フランスでは続々と彼女に関する著作が出版されている。それはおもに「サガン伝説」といわれるものを追究するというものが多い。つまり作品そのものよりもサガンの伝説の始まりとなった『悲しみよこんにちは』以前の彼女の人生と、この処女作以降どのような人生を送ったのか、ということに焦点が当てられている。サガンといえば作品よりもまず彼女の私生活が「商品」として価値のある物だったということはよく知られている。富と名声を一気に手に入れた十代の女の子が歩む人生に人びとはどのような波乱が待ち受けているのか興味津津で、メディアはこぞってサガンの破天荒な享乐的とみえる生活を取り上げ、本人の意思とは関係なく「サガン伝説」を作り上げてみせた。

それは生前から顕著な動きであったが、サガンの死後にはその後半生をクローズアップする本が出てきたわけだ。破天荒な人生を送ったことで有名なサガンだ

が、後半生ではとりわけバイセクシュアルと薬物依存とギャンブルが取りざたされている。しかし私生活ではさまざまなことが変わっていったものの、彼女が作風を極端に変えるということはいになかった。

本稿で取り上げる『失われた鏡』を読んでみると私生活と作品との間に密接なかかわりを持たせる、いわば私小説のようなものでは一切ないことが分かる。サガンは『スウェーデンの城』という戯曲の続編として『心の青あざ』という作品を書いているが、これは一章ごとに物語と自分の独白が交互に展開するという形態のものになっている。これ以外の小説作品で彼女が直接自分の考えをあからさまに出すことはなかった。

『失われた鏡』にはサガンの好きだった演劇の世界が背景として使われている。彼女自身、戯曲をいくつか発表しているし実際上演されている。映画やテレビ用のシナリオも手掛けていた。以前私はサガンの作品と賭けの遊びについて論文を書いたのだが、サガンにとっては演劇を上演するというのも一種の賭けなのだ。チームで長い時間をかけて熟考し、作り上げたものであっても観客の気分次第で幕が開いた瞬間に、労が報われるのか水の泡なのかわかるというのは賭けと同じだというのだ。その瞬間のドキドキ感はそれを味わった者でしか分からない。サガンはそういったライブ感のある演劇というものに惹かれていた。

これまでもサガンは演劇界や映画界に身を置く人物を数多く作品に登場させている。オペラ歌手だったり俳優だったり、演出家だったり、映画音楽の作曲家だったり様々なパターンの「芸能界」で活躍するひとびとを主人公にしてきたのだ。今回の『失われた鏡』もそういったサガンお得意の世界を中心とした恋愛も絡めた悲劇でもない喜劇でもない、パリの演劇界を舞台に展開するとあるカップルと一人の大金持ちの未亡人が織りなす物語だ。

今回この作品を取り上げるのは、サガンの作品のなかでもあまり注目されることがないため、ただ読んでみるだけではなく少し整理してみたいと考え、この場を借りて書かせていただくことにした。深い論考には達していないかもしれないが、この小説の紹介と自分自身にとっての今後のサガン研究への足掛かりになればと思う。

これから、まずはじめにこの小説が書かれた背景、つまりこの作品が出版された当時のサガン自身の様子がどのようなものだったかを少したどってみる。それから作品そのものに移り、あらすじを紹介させていただき、次に主要な登場人物についての考察を試み、最後にこの作品の文体について考えてみたい。

第一章 奇跡的な出版

1989年にサガンと常に一緒にいた兄のジャックが亡くなり、その一カ月後には母マリーも亡くなった。そしてこの二人の死に前後してサガンの二番目の夫であるウエストホフも亡くなった。そして1991年、サガンはさらにとても身近な人物を亡くしている。それは一緒に生活を共にしてきた元モデルで自らのファッションブランドを立ち上げたベギー・ロッシュである。

サガンにとって彼女は生活のリズムを正しいものに導いてくれる必要不可欠な人であり、同じ感覚を共有できる数少ない人だった。サガン自身はバイセクシュアルであることを公表していなかったものの、サガンの死後、いわゆる暴露本のような形態の評伝が多数出版され、そこでサガンの私生活が公表されたのだ。サガン伝説はつねにデビュー当時のままではなかったのである。『悲しみよこんにちは』の直後に作られた伝説は、ウイスキー、夜遊び、スポーツカーだとしたら、新たなもうひとつのサガン伝説は、ドラッグとギャンブルとバイセクシュアルというものだと言えるかもしれない。

サガンは1959年に愛車のアストン・マーチンで九死に一生を得た大事故のあと、治療に使われた薬に依存するようになっていた。それは処方された薬であったのだが、次第に違法の麻薬に手を出していく。ベギーを失ったあと、保護者がいなくなったサガンの心の空虚は計り知れないが、とにかくサガンは書けなくなっていた。書くためにコカインを服用し、コカインを手に入れるお金のために書かなければならないというサイクルのなかに入り込んでしまったのだ。

間に合わせのようにインタビュー集をだすものの、売上は思うほど伸びなかった。新しい「保護者」であるイングリッドという女性は大金持ちの年老いた男の妻だった。しかしイングリッドはベギーのようにサガンを規律ある生活に導くタイプではなかった。彼女に借金を重ねていたサガンはイングリッドのために『愛をさがして』を書き、その印税で借金を返すが、1994年にはそれでも埋め合わせできないほどサガンの経済状態は悪化していたのだ。『失われた鏡』が出版された1996年には彼女は家賃を切り詰めるために小さいアパートへと引っ越し、コカインのかわりにメタドンという薬を服用するようになる。骨粗鬆症を患い、外出も困難になっていった。

というわけで *Le miroir égaré* 『失われた鏡』が出版されたのは奇跡に近い。今回主に参考にさせていただいた『サガン 疾走する生』を見ると、1996年当時サガンは相当に心身ともに相当参っていたことがわかる。若いころの「ウイスキー、車、夜遊び、カジノ」というキーワードは「薬、ドラッグ」に変わってしまい、さんざんなお金の使い方を身につけてしまったサガンは書かなければ生活できない。書くためには薬が必要。しかもサガンに必要なのは違法な麻薬だったので、手に入れるにもお金が必要だった。この悪循環のなかで苦しみながら出されたこの作品には、サガンが以前エッセー集でもたびたび言及していた「書くことの楽しみ」はあったのだろうか。

『サガン 疾走する生』なかで近い人たちへの取材をもとに描かれるサガンの生活状態、健康状態からはデビュー当時とは違い次第に「書くことの楽しみ」を噛みしめながら執筆活動をする、という状態ではなくなっていくように思われる。

この結果的に最後の小説となった『失われた鏡』を執筆中にもサガンは親友のフローランス・マルローに原稿を託してしまうほど、切羽詰まり書けない状態だったようだ。フローランスも困り、この原稿を小説家であり共通の親友だったベルナル・フランクに託す。彼はサガンが一度放棄したこの原稿をサガンの文体を真似して書こうとしたようだが、結局できないことに気づき、今までサガン作家としてはそれほど評価していなかった彼もその文体の個性に気づき、驚き、尊敬したのだという。というわけで結局サガンにしか仕上げることができない、ということが分かり彼女はおそらく相当苦しみながらこの作品を仕上げた。人に途中で渡してしまうほど不可能だと思われた自分自身が書いたものに再度取り組むというのは、想像以

上に苦しいものだろう。

しかし実際に *Le miroir égaré* を読んでみると、そこにはサガンの持つ魅力が変わらず発揮され、ユーモア、軽い皮肉、優美さなどは失われていない。サガンはこの作品を最後にしようとは思っていなかっただろうが、この作品の前にはサルトルへのオマージュからか今まで触れてこなかった領域であるレジスタンスや第二次大戦を背景とした恋愛物語をいくつか書いていた。それに戦争時代を背景にしたもの以外は、主人公がガン告知に悩む男性だったり、今までのサガンの作品からは少しアレンジを加えた新しいサガンの作風が見られていた。

しかしこの『失われた鏡』ではサガンらしいといわれる、パリ、演劇界、ジゴロのような男、強く優しい女、現代でベルエポックを体現する女、などが登場していて昔ながらのサガンが好きな人には「安心して読める作品」ではないだろうか。そしてやはり他の作品のように、華やかにみえる物語の背景にもサガンが常に描き出してきた人間の持つ孤独、喪失感が軽やかに、つまりサガンにとってはエレガントに（サガンはエレガンスとは軽さだと言っていた。）描き出されている。たとえ生死にかかわる重々しい主題であってもそのまま字にするのではなく、軽い皮肉、ユーモアをもって文章にすることができるのは『悲しみよこんにちは』ですでに表れていたように、作家としてのサガンの大きな武器といえる。

次の章では最後まで小説の中では自分らしさを失わなかったサガンの『失われた鏡』のあらすじを見ていくことにする。

第二章 「失われた作品」

この物語のはじまりはパリの描写である。サガンは今までの作品のなかでも頻繁にパリの街を描いているのだが、年を経るごとにその描写の仕方はより複雑に、より深く、時には難解になってきたように思われる。

独特なパリの描写を通り過ぎると、次はタクシーのエンジンが「咳き込んで」止まる瞬間を、オペラ作品である『椿姫』になぞらえるというサガンらしい一節に出会う。サガンは車に関しては他の作品のなかでも実に様々な描写の仕方である機械ではないのだということを繰り返し強調してきた。車というよりもスピードに魅せられていた彼女はアストンマーチンやフェラーリなどのスポーツカーがお気に入りだったが、タ

クシーにも『椿姫』ということばを当てることからサガンの車に対する愛情やユーモアのようなものがうかがえる。

そして人物が登場する。最初に出てくるのはシビルという女性である。シビルはチェコの不遇にして亡くなった若い無名の青年劇作家の作品をフランス語に翻訳し、パリで上演したいと思っている。彼女と同棲している10年来の恋人、フランソワもその仕事を手伝い、この作品を上演することが目下の二人の目標である。しかし二人には先立つものがないため、スポンサー的な人物を探していた。そこにもう一人の重要な人物、ムナが現れる。ムナ・ヴォジェルはかつてパリで女優をしていたがドイツのドルトムントの大金持ちの実業家に見染められ、ドイツで暮らしていたが夫の死後、その大いなる遺産とともにパリに戻ってきていた。演劇に対する情熱が失われていないのか、夫の遺産をより増やそうとしたのか、パリのとある劇場の共同経営者になっていた。そこへ夢見るカップルが面会に行くのである。

この往年の女優に面会するためにシビルとフランソワの二人は彼女の所有する劇場にやってきた。フランソワの言うがままに劇場に足を踏み入れたシビルはまるでお化け屋敷、もしくは迷路のような暗い廊下を手を引張られながら進んでいく。突然彼らの前に鏡が現れる。そのごてごてした装飾のついた古めかしい鏡に映る二人の姿に見入るシビルだが、彼女はその鏡に映る自分たちの姿に違和感を覚える。幸せなカップルという感じがしなかったのだ。そんなシビルの気持ちは知らないままフランソワは後ろからそのままシビルを押し倒してしまう。そのとき鏡の奥でぼんやりとした人影が見え、その何者かによって、フランソワにとっては都合よく明かりが消される。（フランソワにはムナの仕業であることがのちに分かる。）そのような「寄り道」を経て、シビルとフランソワは劇場の古株支配人ベルトミュー氏の待つリビングルームのように作られた事務所に到着し、ベルトミューを介してムナに出会う。

しかし実は、フランソワはすでにこの未亡人に一度会っていた。フランソワが世話になっている出版社との昼食会で偶然顔を合わせたという程度のものであったが、なぜ自分がシビルにそのことを言わないのか彼自身分からなかった。このなんとなくうしろめたいようなフランソワの気持ちは、のちにフランソワとムナが恋仲になってしまうことへの予感かもしれない。会談の結果、ムナは二人が持ち込んだ作品をととても気に入

ってはいのだけれども、フランソワ、シビルの共同作品『にわか雨』²⁾の上演は今の段階では難しいということになる。この作品に真剣に取り組んだシビルはがっかりするが、昨年から彼女には発行部数の多い女性誌の記事を書くという実入りの大きい仕事があった。このことについてフランソワは自分よりも稼ぎが良くなっていくシビルに対していい気分ではいらなかった。フランソワも出版業界に身を置いているのだが、なんとかぎりぎり食べていく、というレベルであった。シビルは二人で生活しているので、お金を稼ぐのはどちらでもいいことで、大切なのは二人が一緒に何かをすることだと言うが、フランソワはシビルを素晴らしい女性だと思うし、愛しているのだが、同じ業界にいてシビルが自分よりも成功を収めていることが何となく納得できない。このチェコの作品にしても二人の共同作業という体裁だが実際のところ、シビルしかチェコ語は分からなかったのでフランソワは手伝いをしたくらいのものであった。しかしとにかくこの作品を成功させることができれば、賭けに勝つようなもので大金と名声が手に入り、すべてうまくいくのだとフランソワは思っていた。

突然、ムナの劇場が『にわか雨』を上演してもいいという知らせが届く。フランソワはムナの気まぐれに説明を求めると言う口実でこっそり彼女を訪ねるのだが、ムナの勤めるドイツのカクテル「ビスマルク」によって感覚が麻痺したようになり、ムナと一夜を過ごしてしまう。浮気はフランソワにとって初めてのことでないにしても自分よりかなり年上の女性との関係は初めてだった。

この上演できるというニュースはシビルを歓喜させた。フランソワは契約したお金でシビルに車を買ってあげたりするのだが、上演には条件があって、深刻な物語であった『にわか雨』を笑いあるものに手直ししなければならなかった。その仕事をフランソワが受け持った。シビルは真摯に作品を翻訳していたのでこの手直しの作業は彼女には苦痛になるだろうと思ったからだ。そしてその作業はシビルは何も知らないままにムナの部屋で少しずつ進められた。シビルに隠れてフランソワは懐かしい香りのする年上の女に会うことをやめなかった。そして愛するシビルの喜ぶ、作品の上演までこぎつけるのである。

しかし結局最後にフランソワとムナの関係はシビルに知られてしまい、フランソワは二人で住んでいたモンパルナスの家から出ていく。その足でムナの方へ行くが、彼女はドイツへ「休養のために」という理由を

残して旅立ってしまった。一人残されたフランソワにはシビルを忘れるのにも、ムナの帰りを待つにも余りある時間だけが残った。

以上がこの作品のあらすじである。おそらくあらすじになったからというわけではなく、この作品には物語の山場のようなものが見当たらない。最初から最後まで同じような流れの中で進んでいく。恋愛のスクランダルはあっても三角関係など、驚くには値しない。それではこの作品の特徴とは何なのか。

サガンの作品に恋愛はほぼ必要不可欠な要素であるが、それが常に一番大切な要素であるとは限らない。たとえば『悲しみよこんにちは』では主人公セシルは出会った男の子シリルと「恋に落ちる」ことはあってもその関係を持続させようとはしない。二人の関係を築くという考えはないのである。これを恋愛と呼べるのかどうか疑問であるし、何よりこの作品のひとつの大きな要素は「若さゆえの残酷さ」にあると思う。父親の婚約者を罫にはめ死に追いやるとするのは、「恋に落ちる」ことよりも相当スクランダラスだと思われるが、当時のブルジョワ的な批評は若い女の子が結婚を考えずに、つまり二人の関係を築こうとせずに肉体関係を持つてしまうことを非難した。

時は経ち「スクランダラス」だと思われる事がら自体が少なくなってきた時代に年上の女性だろうが何だろうが浮気する男の物語に社会的非難も何もないだろう。もちろんサガンは『悲しみよこんにちは』を非難されるために書いたのではないのだが、ただ若いブルジョワの「お嬢さん」が書いたということが人びとに驚きを与えたのだ。二番目の作品『ある微笑』では大学生の女の子とその同じ年のボーイフレンドというカップルが登場するが、この主人公の女の子は彼氏の叔父さんに恋してしまう。若い女の子と中年のオジサンの恋愛も非道徳的だったとしても、珍しい話ではない。人は非道徳なものにこそ魅力を感じる、ということもあるものだ。その後もサガンの作品には色々な組み合わせのカップルが登場するので、『失われた鏡』の男女関係もサガンにおいては「普通」なのである。

この作品の内容は特に社会的メッセージもなく、恋愛における甘美な気持ちの高ぶりで読者を泣かせるということもなく、一見作者が何を伝えたいのかまったく分からないように思われる。出版された当時、フランスの文学に関するテレビ番組で批評されているのだが、それを見てみると、その批評家はストーリーに関しては深入りしていない。サガンが有名人だから取り

上げてみた、という感じだし、恋愛における人間の心理描写というのは何もサガンだけが得意なものではない。そこでストーリーにめばしいものがなかったからか、注目しているのはその描写の仕方などの技術的なところだったように感じた。

サガンは1998年に『*Derrière l'épaule*』という本を出版しているが、これはサガンが出版した小説作品に作者自身がコメントするという本である。このなかで、唯一『失われた鏡』だけがコメントされていない。これは『失われた鏡』が1996年に出版されたので、このコメント集に間に合わなかったためなのか、事情は分からないが、とにかく「仲間はずれ」にされていることは間違いない。

そして日本でサガンの小説作品はコンスタントに翻訳されてきたにも関わらず、『失われた鏡』は今のところ翻訳されていない。出版に関するさまざまな事情があるのかもしれないが、とにかくサガンの最後の作品となったこの小説は色々な意味において、「失われた」作品であるといえよう。

ただでさえサガンの作品は文学的な研究対象になることが少ないために先行研究などの資料が少ないのだが、この『失われた鏡』は他の作品に比べてより一層手がかりがないので考察に独りよがりと偏りが出てしまうと思われる。今回はこの作品を取り上げることによって少しでもサガンの作品の再発見になればと考えたので、あらすじや登場人物についての考察に限った。

第三章 主要登場人物たちの描写について

ここではこの小説の主人公たちがどのように描かれているのかをみていくことにしよう。この小説はストーリー自体に大きな特徴がないために、登場人物たちの存在が重要だ。どのような人物設定でどのような役割を果たすのか、登場人物同士の人間関係はどのように展開されていくのか、というところをみていきたい。まずは最初にシビルはどのような女性として描写されているのか、本文からの引用を用いながら見ていくことにする。

Elle n'avait jamais été une tête brûlée (...)³⁾

彼女は決して無鉄砲であったことはない

Son caractère comme sa réputation étaient depuis toujours outrés, renforcés par ses pommettes hautes, sa

large bouche et une aisance du corps qu'expliquait une hérédité mi-poitevine, mi-tchèque. Et pourtant, ni dans son passé le plus récent, ni dans ses sottises les plus lointaines, elle n'avait usé des charmes et du tempérament slave qu'on lui reconnaissait si volontiers.⁴⁾

彼女の性格とその評判はずっと前から度の過ぎたもので、それらはその高い頬骨、大きな口、半分ポワトゥー地方の、半分チェコの遺伝的体質からなる、のびのびとした体つきによって強調されていた。

Le tailleur de Sybil, beige sur un chemise plus foncé, faisait ressortir le hâle de son visage acquis lors d'une récente et modeste semaine en Touraine.⁵⁾

シビルのスーツはベージュ色だった。ブラウスはそれより濃い色だったが、それは最近トゥーレーヌで過ごした一週間で焼けた、彼女の顔を際立たせていた。

Ses cheveux blonds brillaient dans la demi-obscurité, (...)⁶⁾

彼女の金髪は薄闇の中で輝いていた (...)

このようにシビルは描かれている。ここで彼女にはチェコの血が流れていることがわかり、チェコの気の毒な死を遂げた青年の作品をフランス語に翻訳するという仕事に納得がいく。それに顔の細部の描写から受ける印象はいわゆるはっきりとした顔立ちの女性であり、強い意志を持った女性だ。髪の毛は金髪で今現在は日焼けしている。そして服装はシンプルであるが、流行よりも自分の特徴をうまく引き出せるものを選ぶ、という女性像だ。つまり「自分というものを持っている女性」として印象づけられている。

次にそんな現代的な女性と10年間一緒に生活してきた男、フランソワの描写を見てみよう。

François, lui si châtain, tellement châtain, du regard aux cheveux, François, avec sa peau mate, ses gestes gauches malgré l'aisance qui en émergeait finalement, François était autrement exotique...⁷⁾

フランソワは栗色の髪で、ほんとうに視線から髪の毛まで栗色で、そのくすんだ肌と、ごちない仕草(結局はそこから自然さが出てくるのだが)のおかげで、別な風にいえばエキゾチックだ。

フランソワはとにかく目から髪の毛から茶色だとい

うことがわかる。そしてフランソワについては身体的特徴よりも、その性格描写のほうが長く書かれている。それはしばらくシビルの目線が基本となって物語が進んでいくためであるが、そこからわかるフランソワの性格はどのようなものなのだろうか。

フランソワは「笑ってはいるものの本当の笑いではない」笑い方をし、シビルはまったく無鉄砲なところが無いのに対してフランソワは無鉄砲なところがチャームポイントだと自負している。そしてシビルは10年の間フランソワに対しては自分が正しいと思ってきたが、次第に自分が正しいと思うことが間違っているのだと思うようになっていた。10年間でシビルがフランソワに対して拒絶したことは一度もなかった。

こういったフランソワに対するシビルの姿は「恋する女性」のものとは違うように思われる。恋に盲目になっているあいだは相手のいいところしか見えないものだからだ。一方で現代的ではっきりとした性格の強いイメージの女性とも違和感がある。というのもシビルはフランソワの無邪気なわがままに文句を言わず、逆らうこともせずにいるのだ。一見この相反するような二つのものは、どのように理解できるのだろうか。私はこれは強さゆえの忍耐力ではないかと考える。それに一種のあきらめのようなものもあるだろう。大人になって再び見知らぬ人と出会い、はじめから自分を知ってもらい、相手のことを理解していくというのはとてもエネルギーを要することであり、シビルはそういったことに時間と労力を使うことはしない、現実的な考えを優先させるタイプのように描かれている。シビルはフランソワの子供っぽさに自分にないものを見出したのかもしれない。人は自分とは違うものに惹かれることがよくある。

このようなフランソワに対する冷静なシビルの目線は二人の関係をよく物語っている。すでに二人は十年も一緒に生活してきた、という歴史が読み手にそれとなく伝わるのだ。

そしてこの作品のなかでフランソワの描写にサガンは、ラディゲの『肉体の悪魔』の主人公、そしてラクロの『危険な関係』の主人公ヴァルモンを重ねている。この作品ではないのだが、サガンは自身の小説にスタンダールの『パルムの僧院』の映画製作を背景に使ったこともあり、私には名優ジェラルド・フィリップを思い起させる。ジェラルド・フィリップは映画の『肉体の悪魔』でも『危険な関係』でも主人公を演じている。『肉体の悪魔』の映画では主人公の名前はフランソワとなっている、ということも想起することに

つながったのかもしれない。『失われた鏡』のなかのフランソワは自分がムナと浮気することを『肉体の悪魔』や『危険な関係』の物語とリンクさせて考えるのだが、実際のフランソワはそのどちらの主人公とも似ていない。それほど魅力のある男として描かれていないのだ。しかしフランソワにこういったこと超有名作を引き合いに出して語らせることでよりいっそうフランソワのナルシストっぽい気質や、思い上がり気質、ロマネスクな性格などを滑稽に浮かび上がらせている。

次に三人目の主要人物である元女優のムナ・ヴォジェルはどのような人物なのかみてみよう。

まずムナが劇場の中のフランソワとシビル、ベルトミューが待つ応接室へ入ってくるや否や、その入ってきた時の動作や部屋のなかの様子、他の人物たちの行動などはさておき、ムナの観察が始まる。これはシビルの目線で描かれているということが強調されている。ムナに対して注目する点が、女性が初対面の女性に投げかける視線として意識して書かれているような印象を受けるからだ。

Mouna Vogel était une femme que l'on dit bien conservée dès l'âge de trente ans, une femme délicate et myope qui se trompait dans ses présentations et remerciait trop longuement ses invités au moment de leur départ, une de ces femmes apparemment piétonnées par le monde entier, mais, finalement, toujours protégées à fond par un homme et généralement un homme tout-puissant.⁸⁾

ムナ・ヴォジェルは三十歳のころから人びとが「年のわりには若い」と言ってきたような女性だった。繊細で視野が狭く、人の紹介を間違え、客が帰るときには延々と礼を述べるような女性で、表面的には世界中から踏みにじられているのだが、結局のところいつもひとりの男性、たいていの場合、権力を持った強い男性にしっかりと守られているような女たちの中の一人だった。

この描写で分かることはまず、シビルとの違いである。しっかりした自立心があり、現代的な強さを持つ女性であるシビルに対して、ムナはおっちょこちょいでベルエポックを彷彿とさせるような生活を送る、男性から守られて生きてきた女性として登場するのだ。このことはシビルにとって若干皮肉をこめて表現されているように受け取ることができないだろうか。男に

頼って生きていくというのは、現代的な女性像からは「すべきではない」ことだったはずだからだ。そのために女性たちは女性の権利、仕事の平等性を求めてきたのだから。そしてこの初対面の印象に関する描写のすぐあとに続くのは、より具体的なムナの身体的特徴に関する描写である。

Il y a du charme dans ses cheveux si doux, dans ses grands yeux presque mauves et cette bouche trop bien dessinée et un peu tremblante.⁹⁾

彼女のとても柔らかい髪の毛や、ほとんど薄紫色に近い大きな瞳には魅力があり、口は形が良く、少し震えていた。

先ほどのベルエポック的な女性像に続き、ムナの持つ見た目の魅力の描写であるが、これもまたベルエポックを想起させるものであるといえる。

薄紫色というのはブルーストも『失われた時を求めて』のなかで、女性の描写に用いた色である¹⁰⁾。この色はブルーストの時代に、つまり19世紀末から20世紀初頭にかけて流行した、葵（あおい）という花の名前が由来の1856年に人工的に発明された染料として知られる色である。

ここではムナの瞳の色の形容として使われているが、この色は青みがあった色なのである。青い瞳というのは西欧ではもちろん実際に存在するものであり、我々日本人にとっても理解しやすいのだが、「薄紫色の瞳」というものは想像しにくく違和感をおぼえる。しかし実際青い瞳の人の目をよく見てみると、人によって違いがあり、髪の色と同じで一色の平坦な色ではないことがわかる。つまりモーヴ色が瞳の色の形容として使われるときは、青色のバリエーションのひとつだと考えれば、理解しやすいのではないだろうか。もちろん詩的な感覚で一種の比喩のような形でこの色が瞳の色に使われたと考えることもできるかもしれないが、私はここでは青い瞳のニュアンスのひとつだと捉えている。それは *presque*（ほとんど、ほぼ）ということばが伴っていることからほんとうに完全に薄紫色である、というよりは薄紫色に近いニュアンスを持った瞳なのだと理解できるからである。

サガンの他の作品でもこの色は頻繁に登場し、私の見たところこの色が用いられるのは「若い」とは形容されなくなった年代の女性、しかも何かしらベルエポックの時代を彷彿とさせる特徴を持った女性にしか用いられていない。つまり考え方や生活様式などがいわ

ゆる「古き良き時代」のままである女性ということだ。

もしくはより自然な形でチューリップなどの花の色、この作品でもムナの部屋の絨毯がピンクとグレーとモーヴ色であったりと、人物以外に用いられている。この色はサガンにとっては女性的であり、成熟していて、男性に対するセックスアピールを持った女性に使われる色なのだ。これはブルーストに通じる考え方ではないだろうか。サガンのブルースト崇拝は有名であるが、とくにベルエポックという時代背景に惹かれているようだ。サガンがこの色をシビルに使わないのはこういった背景を踏まえると納得がいく。現代的で独立心の強いイメージの女性には必要のない色の形容詞なのだ。

そしてムナの観察は続く。雰囲気、身体的特徴の次は彼女が身につけている装飾品である。これはジゴロでもないかぎりやはり女性らしい注目点ではないだろうか。

Sybil ne s'attarda pas sur le collier de perles ni sur les deux bagues accrochées à des mains plus vieilles que le visage. Le tout était superbe. Et elle-même qui n'y connaissait pas grand-chose en bijoux reconnaissait la qualité de ceux-ci comme n'importe quelle femme de bien des millieux eût pu le faire.¹¹⁾

シビルはすぐに真珠のネックレスと、顔より老けた手にはめられている二つの指輪に気付いた。すべて極上の品だ。彼女自身は宝石について多くのことは知らないが、ある程度の女性なら誰でもできることだろうが、それらのクオリティーの高さは分かった。

この女性目線で値踏みされた宝飾品は素晴らしいものであったとしても、手に関するくだりが現実的である。一般的にも年齢は手や首にでやすいといわれる。ムナは年齢のわりに美しいが、宝石の輝きに幻惑されることなく手を見ればやはり「古い」は隠せないのだということをシビルは冷静に見ている。

これら三人の主要登場人物を見てみると、まずシビルとムナの違いが著しいことに気づく。ひとことで言うならばシビルは現実的な女性であり、ムナは非現実的な女性であるといえるかもしれない。そして物語のなかでもシビルとムナの間をさまようフランソワはなんとなく定まらない、年齢的には充分大人といわれてもいまだに自分というものを探している途中であるよ

うな、ふわふわとした、地に足のついていない印象を受ける人物として描かれている。

そのことはシビル目線で物語が進んでいるあいだも、さまざまな描写からうかがえるのだが、フランソワの目線で物語が進められるように変わってもそれは変わらない。ということは客観的にも主観的にもフランソワは一語で表すと「適当」な男なのだ。だからフランソワがムナと浮気したとしても読者はまったく意外性もない。シビルを愛しているのにも関わらず、どうして浮気なんかしてしまうのだろう、という本人の「苦悩」が描かれるのだが、それは結局フランソワの男としての器の小ささを強調しているように思われる。そのうえシビルがほぼ一人で仕上げた重々しい悲劇作品を浮気相手の部屋で喜劇作品のように書き変えてしまうあたり、フランソワの厚かましさには驚かされるものの、「いい男」とは思えない。さいごに「二兎追うものは一兎も得ず」という状態になっても「かわいそうなフランソワ」だとは思えない。それはフランソワという男がこの小説のなかで非常に魅力あふれる男というふうに描かれきれていないからかもしれない。ともかく物語の最後の最後でうまく立ち回ってきたフランソワが一人になってしまうのは気の毒と取るか痛快と取るかは読み手の好みにゆだねられている。

おわりに

サガンは1970年代から、作品を口述で作ってきた。助手を使い思いつくままに口に出し、書きとらせる。その原稿は形容詞や表現を少し変える程度で、ほとんど直すことなく出版されてきたようだ。というわけで『失われた鏡』も口述によって書かれたものである。フランス語は話されることばと書かれることばに違いがある。話したことばをそのまま小説にすることばはそれ自体がひとつの特徴といえるものである。ひとつにはリズム感が出てくるだろうといえること、そして読むときにすんなりと頭に入るだろうと思われることだ。フランス語で考えてみるとネイティブスピーカーでない限り、その微妙なニュアンスは味わうことができないかもしれない。しかし日本語で考えても同じことが言えるのではないだろうか。口承文学はそれ自体が語り継がれたものであるだけに、読み物に形を変えてもそのニュアンスを残すだろうということは想像がつく。サガンの小説にはそういった流れが感じられるために良く言えば「読みやすい」そして純文学の立場から見れば「読むに足りない」ものであった

かもしれない。しかし昨今消滅しそうな「文学」という分野が幅を広げてより多くのものを受け入れる余裕があるとすればサガンの作品もより評価されてよいのではないだろうか。

サガンの評伝のなかで、ここで主に参考にしてきた『サガン 疾走する生』のなかで、著者であるジャーナリストのマリー=ドミニク・ルリエーヴルはサガンの作品の文体分析をソルボンヌ大学の教授に依頼している。サガンは有名人でその作品もたくさんの人に読まれてきたものの、そのように分析されることは今まででなかったように思われる。常にサガンの私生活と結び付けて解釈されるのがサガンの作品の特徴だといえるほどに、その文体そのものに迫ることは少ない。

文法学者であるジャン=ルイ・ド・ボワシュー教授はルリエーヴル氏に依頼を受け、大学の研究テーマ一覧を調べてみたが、サガンに関する論文は「ないはずはないのだが」見当たらなかったのだという。「大学の研究者にとってサガンとは、雑文、大衆文学、ティーンエイジャーの読み物でしかないのだ。」²⁾と著者は書いているが、彼女がこの評伝を出版したのは2008年1月である。その年の12月に私はパリ第7大学にてサガンに関する修士論文を提出したのだが、参考のために大学で調べてもたしかにサガンに関する論文は一つも見当たらなかった。私の論文のテーマはサガンの作品と賭けの関係についてだったので、文体分析ではないから、どちらにせよお役に立てたとは思えないものの、文学研究におけるサガンのポジションが分かっていただけだろう。

ルリエーヴル氏はさらにド・ボワシュー教授の机の上にあるサガンの本を見て、「いかにも大衆的な装丁のサガンのポケット版2冊が載っている。確かに、ソルボンヌには不似合いだ。僧侶のポケットから女性の下着が覗いているような、カール・ラガーフェルドのキャディ・バッグにヌテラ(チョコレートペースト)のボトルが入っているような、〈ありえない〉取り合わせなのだ。」³⁾と書いている。これを読んで私はパリ第7大学の私を担当することになってしまった不運な教授に、今更ながら私の研究テーマを受け入れてくれ、指導してくれたことを感謝したいと思った。

本題に戻ると、このド・ボワシュー教授の専門は17世紀文学、とくにラ・フォンテーヌである。17世紀文学、18世紀文学を対象とした『文体研究』の著者でもある権威であること、そして彼は大のサガンのファンであるということを強調しておきたい。このような権威がどのような条件のもと分析作業を進めたのか

を『サガン－疾走する生－』から以下に引用する。

分析作業は、厳格な手順に則って行われる。執筆時期の異なる3編の小説とインタビュー集から無作為に30ページを抽出する。使ったのは、1996年に刊行されたサガンの最後の小説『失われた鏡』、異色の作品『愛の中のひとり』、個人的に好きな『1年ののち』、そして1992年に刊行されたインタビュー集『愛という名の孤独』だ¹⁰⁾。

そしてド・ボワシュー教授は助手にインターネットで「サガン」と「言語」というキーワードで検索をかけ、サガンの書評に使われることばを集めたそうだ。そのなかでよく使われていたことばは、「軽さ」、「流れるような」、「透明感のある」、「簡素」、「徹底的なシンプルさ」、「気取らない」だそうだ。しかし教授の分析結果からは、それらのずっと昔から使い古されてきたことばが実は当てはまらないのではないかという結論へと進む。そこで例として挙げられているのがこの『失われた鏡』である。先に述べたようにこの作品は「失われた作品」だといえるほどに手がかりが少ないのでこのように分析の仲間にいれてもらえたことに感謝しつつ引用させていただく。

ボワシュー氏は語る。「『失われた鏡』で、私はまず、面白半分には執筆の過程をたどりなおしてみました。それから全体を読みました。不思議な体験でした。最初は、文章が平面的で、世間の人が言うように三文小説のようだと思いました。でも、途中からだんだんと上手くなっていくんです。サガンはやはり作家なのだ」と再認識しました。」¹¹⁾

これはやはりこの『失われた鏡』がストーリーよりもサガンの文体のなかに魅力があるということだろう。いくらストーリーがものすごく面白いものであっても、文章にする力量によって、その魅力は半減もするだろうし、倍増もするのだ。それをうまくできるのが作家という人たちである。

私はサガンの作品には独特の音楽的側面があるのではないかと考え、論文のテーマにしようとしているのだが、やはりそれを語るにはこのような地道な作業が必要なようだ。そのためには今のところ準備が足りていないので、今回は音楽的なことを主題にしなかったのだが、この分析でド・ボワシュー教授はさらにサガンの初期の作品『一年ののち』を読んでいる間、奇跡

のような心地よさを実感したという。さらに教授はその音節数を数え、サガンの文体の多くは三拍子であるということを見つけている¹⁶⁾。

これらのド・ボワシュー氏による分析をみると、サガンの小説には詩に似た美しさがあるといえるようだ。つまり声に出して読んでみるとその美しさがよく引き立つ、といった種類の美しさだ。サガンの作品に関しては、洗練された、軽い、音楽の小品のような、といったことばがよく使われる。しかし実際には表面的な流れのなかに、詩作品のような奥深さ、味わいなどが控えめに隠されているのだ。そういったことに気づくには作品と向き合い、古典的手法である文体分析に取り組み、膨大な文学的知識と良例と照らし合わせてみるという作業が必要になるだろう。

今回、最後の小説作品だから取り上げてみようという短絡的な思い付きから本稿を書いてみたものの、これからサガンの作品を研究するにあたり、まだまだなされていないことがたくさんあるということに改めて気づかされ、大いに触発された。今回はサガンの最後の作品を紹介し、登場人物の描写に注目するということにとどまるが、その文体の分析という先行研究を参考にしつつ、サガンの作品と音楽性という新たな取り組みに向けての一試みとしての可能性も最後に加えて述べることができ、サガンの作品を研究する私には意義のあるものになった。

注

- 1) 日本語の翻訳が出版されていないため、この題名はルリエーヴル氏の著書 *Sagan à toute allure* の永田千奈氏訳による『サガン 疾走する生』のなかの使用テキストに関する記述から引用させていただいた。
- 2) この『にわか雨』と訳した *Averse* というのはサガンの *La Laisse*, Julliard, 1989. (『愛は束縛』, 河野万里子訳, 新潮社 1991.) の中で主人公のピアニストが映画音楽の主題歌として作曲し、大ヒットとなった作品と同じ名前であり、これが『失われた鏡』のなかでは演劇作品の題名として登場している。
- 3) *Le miroir égaré*, Plon, 1996. P 11
- 4) *Ibid*, p 11
- 5) *Ibid*, p 20
- 6) *Ibid*, p 20
- 7) *Ibid*, p 11
- 8) *Ibid*, p 28
- 9) *Ibid*, p 28
- 10) 阪村圭英子 *Les yeux mauves de Mme de Guermantes*, 『GALLIA』, 40号, 2000, 大阪大学
- 11) *Le miroir égaré*, p 28
- 12) 『サガン 疾走する生』, p 200
- 13) *Ibid*, p 200

14) *Ibid*, p 200

15) *Ibid*, p 200

16) 『サガン 疾走する生』を参照のこと。

参考文献

〈使用テキスト〉

・ Françoise Sagan, *Le miroir égaré*, Plon, 1996

〈その他の参考文献〉

Françoise Sagan, *Derrière l'épaule*, Plon, 1998

・ マリー=ドミニク・ルリエール, 永田千奈訳, 『サガン 疾走する生』, 阪急コミュニケーションズ, 2009

Marie-Dominique Lelièvre, *Sagan à toute allure*, Denoel, 2007.

Jean-Claude Lamy, *Françoise Sagan une légende*, Mercvire de France, 2004

Annick Geille, *Un amour de Sagan*, Pauvert, 2007